

教育委員会会議録

令和3年(2021年)12月定例教育委員会会議

開 会 日	令和3年(2021年)12月23日(木)	
開 会 時 間	午後2時00分 ~ 4時00分	
開 会 場 所	教育センター 4階 大研修室	
出 席 者	委 員 会	遠藤洋路 教育長 泉薫子 委員 出川聖尚子 委員 小屋松徹彦 委員 西山忠男 委員 苫野一徳 委員
	事 務 局	松島孝司 教育次長 森江一史 教育次長兼学校教育部長 中村順浩 教育総務部長 他
提 出 議 案	議第85号 熊本市立総合ビジネス専門学校学則の一部改正について 議第86号 熊本市立総合ビジネス専門学校の管理運営に関する規則の一部改正について	
報 告	(1) 天明校区施設一体型義務教育学校基本構想(案)について (2) 金峰山少年自然の家再建事業に伴う実施方針案及び要求水準書案の公表について (3) 学校評価項目等の変更について	
自 由 討 議	必由館高校改革について	
署 名	出川 聖尚子	
	小屋松 徹彦	
会議録作成者	教育政策課 木村三恵	

〔開会の宣告〕

遠藤洋路 教育長

令和3年12月定例教育委員会会議を開会いたします。

〔会議の成立〕

遠藤洋路 教育長

本日は、私の他4人の委員が出席しておりますので、この会議は成立しております。

会議録署名人は、出川委員と小屋松委員とします。

遠藤洋路 教育長

本日の議事に移ります前に、一言だけご挨拶申し上げます。

先日12月7日に行われました令和3年第4回定例市議会において、教育長の任命同意に対する議決をいただきまして、15日に改めて教育長としての辞令をいただきました。3期目、3年の任期ということで務めさせていただきます。

どうぞよろしくお願いいたします。

日程第1 前回会議録承認

遠藤洋路 教育長

11月25日開催の令和3年11月定例教育委員会会議録を各委員のお手元に配布しております。この会議録を承認することに、ご異議はありませんか。

(異議なしの声)

異議なしと認め、前回会議録を承認することに決定します。

日程第2 事務局報告

〔1〕事業・行事等報告について

○ 前回定例会議(R3.11.25)以降の事業・行事報告

○ 今後の予定

日程第3 議事

・議第85号 熊本市立総合ビジネス専門学校学則の一部改正について

《石加 浩二 指導課長 提案理由説明》

〔採決〕 【原案どおり承認された】

・議第86号 熊本市立総合ビジネス専門学校の管理運営に関する規則の一部改正について

《石加 浩二 指導課長 提案理由説明》

[採決] 【原案どおり承認された】

日程第4 報告

・報告（1）天明校区施設一体型義務教育学校基本構想（案）について

《松永直樹 学校改革推進課長 提案理由説明》

西山忠男 委員

現在各学校に特別支援学級があると思いますが、新しい一体型の学校では、特別支援学級は何クラスぐらい設置される予定でしょうか。

松永直樹 学校改革推進
課長

具体的なクラス編制等の検討はこれからということにはなりますが、今現在におきまして、天明校区の各小中学校においても特別支援学級は設置されておりますので、その現状も踏まえて、関係課と協議をしながら設置に向けて進めたいと考えております。

また、施設一体型義務教育学校の先進事例も参考に議論を進めていきたいと考えております。

西山忠男 委員

1つ気になりますのは、やはり通学の問題で、一応スクールバスが予定されているようですので心配はないかと思いますが、子どもたちが安全に通学できる、特に特別支援の生徒さんたちには配慮をお願いしたいと思います。

苫野一徳 委員

総合教育会議でも確かお話をしたような記憶もあるんですけど、こちらの先進事例で京都の事例が載っておりますけど、今私がとても注目しているのが福島県の大熊町ですね。「学び舎ゆめの森」という、この4月に開校するんじゃないかと思うんですけど、幼保、小、中なんですよね。これの施設一体型で、市民が集うライブラリがあり、教員研修施設があり、大学のサテラ

イト機関がありという感じですね。私はよく学校を、ごちゃ混ぜのラーニングセンターにしていけたらいいなと言うんですけど、多様な人たちがごちゃ混ぜになりながら学び合ったり教育活動に従事したりできるという、こういった先進事例も視察などとかヒアリング等々もできたらいいんじゃないかなと思いました。西山委員もおっしゃった特別支援学級等についても、こちらの案の中でインクルーシブ教育を推進するといったような言葉がありましたよね。支援学級というかたちである程度取り出したり分けたりするのがいいのか、もしかしたら多様な人たちが当たり前のように多様な中でごちゃ混ぜに混ざり合いながら学べる環境をつくれるのか、そういったことも併せて考えていけたらいいかなというふうに思った次第です。すみません、質問というか意見なんですけど。

松永直樹 学校改革推進課長

ご意見ありがとうございます。以前いただいた情報提供を基に我々のほうでも、「学び舎ゆめの森」については調査をいたしました。確かに図書スペースを中心としまして、各学校施設、保幼、小、中、一体型施設といたしますか、まちづくりも学校づくりの観点として含めていこうという非常に参考となる先進事例だというふうに考えております。我々としましても、ぜひこの学校関係者の方にお話をお聞きしたいというふうに考えておりますので、こういった事例も参考に、さらには民間委託というかたちで基本計画については民間事業者も入りますが、民間事業者においても様々な先進事例を集めるということで契約に盛り込んでおりますので、様々な例を参考に学校をつくっていきたいと思います。ありがとうございます。

西山忠男 委員

今苫野委員からインクルーシブ教育のお話が出ましたけど、確かにそれが実現できれば一番いいと思うんですけど、ちょっと私が気にしていますのは、今まで比較的小さな学校で特別支援教育を受けていた生徒たちが、大きな統合された学校に移るということで不安を抱えることになりはしないかというのがちょっと心配です。人数が多だけでちょっと不安になるということもあるかもしれませんので、そのあたりは実態に応じてきめ細かい配慮をお願いしたいと思います。よろしく願います。

遠藤洋路 教育長

はい。分かりました。

他の委員からご意見はいかがですか。

では、他にご発言がないようでしたら、本件は以上といたします。

- ・報告（2）金峰山少年自然の家再建事業に伴う実施方針案及び要求水準書案の公表について

《田口 清行 青少年教育課長 報告》

- ・報告（3）学校評価項目等の変更について

《石加浩二 指導課長 報告》

西山忠男 委員

「確かな学力を育む教育の推進」のタブレット活用なんですけど、「タブレット端末を活用して学習していると思いますか。」という問いかけだと、タブレットを使うことが目的になってるように見えるんですね。そうではなくて、タブレット端末を活用した学習によって成果が上がっていると思いますかというように、タブレット活用の有効性を問うような質問をした方がいいんじゃないかと思いますが、いかがでしょうか。

石加浩二 指導課長

確かにそういうふうに取り扱えると思います。これからまた毎年文言等については変更していきますので、再度検討させていただきたいと思います。今年度につきましてはもうこれを出しておりますので、これでいきたいと思っております。申し訳ありません。

出川聖尚子 委員

この質問の回答項目というのはどういうものになっていますか。選択するようになっているかと思いますが、回答の項目を教えてください。

石加浩二 指導課長

選んでいくようにしてあります。評価の項目で1、2、3、4というかたちで、それをよく思いますかとか、そうでもないとかいうかたちで選ぶような設定にしております。ちなみに、この項目の中で空欄のところがございますけど、空欄のところは

	<p>お子さんに、子どもさんに質問してもなかなか評価ができないんじゃないかというところで抜いているところになります。</p> <p>以上でございます。</p>
出川聖尚子 委員	<p>ありがとうございました。</p> <p>私もこのような学校評価アンケートを子どもが持ってきてくれるんですけど、「よく分からない」という項目がないので、付けられないところは空欄にした方がいいのか、悩んでしまっていたので、「よく分からない」という項目もあるのがいいと思いました。</p>
石加浩二 指導課長	<p>ありがとうございます。確かに保護者の方から見て、自分でちょっと判断できないとかいう部分もあると思いますので、そこも加えて検討させていただきます。ありがとうございます。</p>
遠藤洋路 教育長	<p>「そう思う」とか「思わない」とか、確かにそういうだけでなく、「分からない」というのも、項目によってはあるかもしれません。</p> <p>では、それはまた来年度に向けて検討の中で考えてください。他にはいかがでしょうか。</p>
苫野一徳 委員	<p>この結果の活用の仕方について教えていただけますでしょうか。</p>
石加浩二 指導課長	<p>結果については、各学校がまず集計をします。それを学校評議員の方々に結果報告を説明しまして、学校評議員の方からコメントをいただくと。それを加えてホームページで発表すると。それと、発表したものを教育委員会にも提出していただいていると。こちらでは学校ごとに取り組を進めていくというのも1つ。</p> <p>もう1つは、学校長が学校の運営方針あたりをつくりますので、その学校教育活動がどれだけできているかとかという指針にこれを活用しているというところも、もちろんございます。</p> <p>以上でございます。</p>
苫野一徳 委員	<p>これは今後のことかなと思うんですが、授業力向上の質問のところ、「わかる授業、楽しい授業づくり」ということがあるんですけど、もちろん大事な前提だと思うんですが、タブレットを導入して、その大きなねらいというのはやっぱり子ども主</p>

体、学習者中心で学んでいくということだと思うので、楽しい授業、わかる授業という、先生がつくるものみたいな、先生主導のイメージもなくなっているので、そういった子どもが主体になっているかどうかといったような、そういった観点も今後は入れていく必要があるんじゃないかなという感じがいたしました。

遠藤洋路 教育長

確かに、主体的・対話的で深い学びになっているかというようなことを聞くような質問の仕方があるかもしれませんね。検討よろしくをお願いします。

苫野一徳 委員

細かいところで。評価項目をつくるのって実はものすごく技術的に高いんですね。これって学校に対するメッセージでもありますよね。どういう実践をしてほしいのかというメッセージにもなるので、ものすごく考えないといけないものだと思うんですけど。なので今後さらに精査をしていくのが大事かなと思うんですが。例えば学校の支援体制のところ、「学校は、支援を必要とする子どもの教育について、共通理解を図りながら取り組んでいると思いますか。」というこの意味もちょっと明確じゃないなという気がするんですよね。何の共通理解なのか、学校全体の共通理解なのか、保護者も含めた子どもも含めたようなことなのかとか、こういうちょっと不明確に読めてしまうものを詰めていくというのは今後大事になってくるかなというふうに思いました。

遠藤洋路 教育長

確かに毎年この教育委員会会議にかけているわけではなくて、今回変更するからということにかけているんですね。来年度に向けては、苫野先生は専門家ですから、見ていただきながら変更するというのもいいかもしれないですね。全体を見ていただいて、ご意見が他にもありましたらいただきながら進めたいと思います。よろしくをお願いします。

他によろしいですか。

では、他にないようでしたら、本件は以上といたします。

日程第5 自由討議

・必由館高校改革について

《松永直樹 学校改革推進課長 説明》

《西山忠男 教育委員 意見》

遠藤洋路 教育長

今回の西山委員のご意見、それからこの前12月17日に学校との意見交換ということで開催をしていましたので、そういった内容も踏まえた自由討議ができると思います。

まず、泉委員と出川委員はこの前の意見交換会に出られておりませんので、もしよろしかったら出られた苫野委員、それから小屋松委員、それぞれからご感想あるいはそれも踏まえたご意見をいただければと思っておりますけど。

小屋松徹彦 委員

前回17日に必由館高校に行きました。まず、校内見学させていただいて、芸術コースというんですかね、美術、書道、それから服飾デザイン、こちらの方のいろんな作品等も見せていただきましたし、生徒さんたちとお話をさせていただきましたけど、一言で言ったら素晴らしい作品が多くて、これだけレベルの高い芸術コースなんだなということを改めて思いました。

それと、あとは意見交換の中で出た意見は、大ざっぱに言いますと、生徒と先生とのコミュニケーションが非常によく取れているなとか、学校自体がそういった面では非常に安定しているんだろうなというふうに思いました。そういった面は今の必由館高校の特徴ではあるのかなと思いました。

ただ、いろんなご意見を聞いておりますと、相対的にいうと、現状維持といいますかね、あまり現状を変えたくないというそういう感じを受けました。確かにそういった面は現在の生徒さんたちにはあるのかなと思いましたが、今の改革をどういうかたちで進めていくかという点はまず基本的な考え方として、まず少子化ですよ、それにAIとかのそういう技術で非常に世の中が大きく変化していったらという、これをまず捉えなきゃいけないと思うんですね。例えば皆さんご承知だと思いますが、Amazon Goというのがありますよね、あれは要するに無人のコンビニですね。もう2、3年前ぐらいからアメリカでは複数できてきておりますが、あのAmazon Goによってというか、あれは結局AIが無人のコンビニをつくる基になっているわけです。あれによってコンビニに店員さんがいなくなるわけですね。コンビニに店員さんがいなくなるという

ことは、コンビニの店員という職業が1つ消えてるわけですね。そういうかたちで、多分今後AIがどんどん広まっていきますと、かなり今ある仕事というのが変わっていく。特に5、6割ぐらいはもう今の職業がなくなっていくと言われているぐらいですからね。そういった非常に変化が激しい時代を生き抜いていく子どもたちにどういった教育が必要なんだろう。そういった場面が非常に大事になってくるのかなと思うわけですね。

つまり、変化に主体的に対応していく力、そういったものをどうやって付けてくかということが今回の市立高校の、必由館高校の改革には必要な視点かなというのがあります。

それともう1つは、もう既に小学校、中学校ではアクティブラーニングということで主体的・対話的で深い学びということをどんどん今授業の中に取り入れ、そういった子どもたちがいずれ高校に上がってくる。そういうこの先のことを考えたときに、どういう改革がいいんだろうかなという視点からきつと考えていった方がいいんじゃないかなというふうに思います。

そういったことから、これから言うことは私の私見になりますけど、今の必由館高校の生徒さんたちが必由館高校に入っていく、その動機というか、皆さんがアンケート取られてたんですけど、その中で必由館高校を選んだ理由として、通学しやすい、それから学力に合っている、行きたいコースがある、というのがベスト3なんです。これから言えることですが、学力に合っている、つまり今の高校入学というのは偏差値を基にして、じゃあ自分はどこの高校に行こうかというような、そういう入学が結構多いんじゃないかなというふうに思うわけですが、この改革を通して目指したいのは、いや、私はぜひこの必由館高校に行きたい、こういった特色を持った必由館高校に行きたいんだという、そういった生徒さんたちを迎えるような学校改革であってほしいなというふうに思います。

意見の中でもかなり普通科に対する執着といいますか思いが強くて、普通科ということを残してほしいというようなことがありましたけど、この普通科の捉え方というのが、生徒さんたちの普通科の捉え方とこの改革案で示されている捉え方とちょっと違ってんじゃないかなというふうに思ったんですね。いわゆる今の普通科をもっと発展的というか、もう少し特化して、そしてそういう学科に変えていくということであって、普通科が完璧になくなってしまうというようなことじゃないだろうというふうに私は思っています。そういったことから、この

普通科に対する言葉というのは生徒さんたちのこだわりが強いなというふうに感じました。

それと、学校案に出ますように、少人数クラス編制が36人というふうにされていますけど、多様な生徒へのきめ細かい指導というか、そういったことをやっていくためにはどうしても少人数編制のクラスというのはやっぱり必要だろうと思います。今現在40人ですかね。これが36人では効果的にどうなんだろうという疑問を持ってまして、私は少人数クラスを編制するのであれば、最低30人ぐらいの規模にはもっていかないと効果としては薄いんじゃないかなというふうに感じました。

それから、もう1つ大きな課題である中高一貫ですけど、いわゆる系統的な教育の必要性というのは、これはお話をしている学校側も同じ方向を向いていらっしゃるなというのは感じますね。今教育委員会を出している案とそう実質のところではこの中高一貫に関しての考え方は変わらないなど。先ほど西山委員もおっしゃっていましたが、物理的な問題が結構多くて、この中高一貫に対する抵抗感というのがあるのかなというふうに感じましたけど、これはやはり必由館高校の特色としてはぜひ前向きに検討してもらいたいなと思いますし、今そういう課題があるのであれば、そこをしっかりと話をしていく機会をもっと増やしていく、そういったことで相互の理解を深めながら、やっぱり目指すは中高一貫の導入はありかなというふうに思います。

一人でしゃべりましたが、以上で、感想と意見とさせていただきます。

遠藤洋路 教育長

ありがとうございます。

では、苦野委員、お願いします。

苦野一徳 委員

小屋松委員がおっしゃっておられたように、必由館高校はとても良い学校だなというのは感じました。生徒さんたちも本当に素晴らしいし、先生方もとても熱心で素晴らしい。この前の皆さんとの対話の中で、ああ、居心地のいい学校だなというのは本当に心から思いました。だからこそその課題というの逆にあるのかなという気もしました。というのは、あのときにもお話をいたしましたけど、学校の立場からすると、当然やはり今を見るわけですけど、今とこれまでというところにフォーカスがとても当たっていて、これからどうなるかという視点をもし

かしたら、もうちょっと工夫していかなきゃいけないのかな。それはどういうことかという、あのときにもお話をさせていただいたように、今、年間60校統廃合しているわけですね、全国で。これから10年間で5、6校に1校がなくなっていくというそういう時代になってくると、確実に今、定員充足している、倍率もそれなりにあるからといって、今後10年で確実にやってくるわけですね、その未来が。そういう中で、小屋松委員がおっしゃったように、偏差値輪切りで考えた高校選択が、もうそんなの言っていられないようなことが市立学校にはやってくる。必由館だから行きたいというふうな学校にしていく必要がある。そうでない限り市立で高校が2校存続するというこの存在意義ですね、これから問われることになると思いますので、必由館だから行きたいということは、必由館だからというのはどういうことなのかということを今後考えていかなきゃいけないと思いますね。

そこで西山委員がおっしゃったことですね。目指す学校像、1番上位のところにはずれがあるので、今申し上げたような5、6校に1校がなくなっていくというこの現状を捉えたときに、このことをまず共有することと、それから、じゃあそのことを現実として受け止めたうえで、じゃあどういう学校を目指せば。必由館だから行きたいと思う市民や九州の、九州の表現というのが分かりませんが、熊本県内の生徒たちにアピールするようなことはどういうものなのかと考えたときの、まさに目指す学校像をもうちょっと精査しなきゃいけないなという感じはいたしました。

私たちのグループでは、グローバル人材の育成というのはあまり評判が良くなかったんですね。それはよく分かりました。今時グローバル人材、グローバル人材と声高に言うのはどうなのかという気持ちもしなくはない、グローカルという言葉が今時代遅れなのか、それとも時宜に合っているのか分からないんですけれど、どちらかというところグローバルのほうがニーズ的には合うかもしれませんが。要するに広く世界を見渡しながらも、足元でしっかりと地に根を張っていくというか、そういったことも含めて、本当に私たちが必由館だから、そういうときの目指す学校像というのを、ここから共通理解を図っていかないと、じゃあコースどうするとか中高一貫どうするかというのはその後でくっついてくる、その後かどうか分からないですけど、そこは1つ大事にしないといけないのかなという感じは

遠藤洋路 教育長

たしました。その後じゃないかな、中高一貫は、というのは、物理的ないろいろな事情もありますからね。先ほど西山委員もおっしゃったように、総合的に考えながら、ただやはり目指す方向はもっと議論を重ねたいというのがあのときの思ったことになります。

ありがとうございます。

私の感想も簡単に申し上げます。感想として、皆さん現状に非常に満足しているということです。今がいいんだという気持ちを非常に強く感じたということですね。ですから、中から見た必由館の満足感とか居心地の良さということと、外から見てこのままで大丈夫なのかということのギャップが非常にあるんだなということを思ったことが一点。

それから、先ほど小屋松委員がおっしゃっていましたが、校内見学を最初に、校長に連れて行っていただいて。校内見学でも学校のいろんな実績でも、芸術コースと服飾デザインコースがほとんど大半の紹介としてあって、学校の特色であるのかなと思ったんですけど、普通コースというんですかね、普通科というところの存在がなかなか見えなかったというところですね。そこは実際どうなのかなというのはもう少し見たいなというふうに思ったところです。

入学の動機も、ぜひ必由館に、という学校にしたいということで我々は考えて改革案もつくったんですけど、その前提が結構違って、偏差値の輪切りの中で学力と場所がちょうどいいからここに来たんですというふうに、結構皆さんはつきりおっしゃるので。そういう人の入る学校が必要なんだと。大学進学はしたい。ですから、受験勉強がしたい。グローバルとか探究じゃなくて受験勉強がしたいですということを結構強くおっしゃったのが印象的でした。そういう学校で現状としては非常に満足しているということなのかなというふうに思います。それがこのままじゃだめだよと思うのか、いや、このままがいいんだと思うのかという、その価値観というか目的認識とかの違いなのかなというふうに思っています。

現状うまくいってることは事実なので、このままにしてもうまくいかなかったらそのときに変えるということなのか、先ほど小屋松委員、苫野委員がおっしゃったように、時代の変化を先取りして改革か。現在の必由館の教職員の先生も先取りして変える必要はなくて、今がちょうどいいからいい、もし変わ

ったら後から変える、今のままの方がいいというような、そういうことを強く感じたかなというふうに思います。その変えるタイミングの問題なのかどうなのか。

ただ、普通科の場合には、もし先取りして変えない場合に、志願者がどんどん減って定員割れするというようになった段階から挽回するというのは、そこから特色を出していくというのは、非常に難しいように思うので。もし現状でうまくいっていますけど、うまくいかなくなったときにもう手遅れということになりかねない、そういう危険もあるのかなというふうには思いますね。芸術コース、服飾デザインコースに関してはその特色ということできっと挽回も可能だと思います。他には、県立、私立でも、そちらに行きますという状態になっちゃってから、市立の普通科を立て直すということは非常に難しいことではないのかなというふうに思うので。そうなる前に先に何かをするか、ある程度になって危機感が出てくるまで現状でいくかというような、そういう選択肢があるように思いました。望まないものを無理やり先取りして変えるということも、それはそれでうまくいかないかもしれないので。そこはどうなのかなというふうには思ったところではあります。ですから、意見交換としては本当に、非常に強い現状維持に対する希望といいますかね、意思、要望があるかなというふうに思ったところです。

あと、意見交換の方法としてやっぱり人数的に、10人や11人対1人だと、あまり意見交換というよりは意見を伺いますというかたちになってしまっただけ。だから、もし対話とか意見交換をするんだったら同じぐらいの人数にした方がよかったなと。これからの課題ですけど、そうする方がいいのかなというふうに思いました。対話、できるだけ意見を私も自分の思いを言うようにはしたんですけど、そうすると逆に1人で10倍喋るみたいになってしまうので、それもどうなのかなということ。例えば5人対5人とか10人対10人とか、ある程度同じ人数のバランスが取れた中で意見交換というかたちにすると、相方向のコミュニケーションになるのかなと思いました。これはこちらのやり方の問題ですよ。

今日の場合だと逆に校長が今1人で、私たちは6人ということ。今度は人数がやっぱり比率が違うので、こちらの意見を言う場であるし、学校に行ったときに10対1だと学校の意見を言う場になるし、どっちにしても一方通行なんです。一方通行のものをただ繰り返すだけになってしまうよりは、双方向の

対話ができる、そういう機会をこれからつくっていったほうがさらに議論が深まるんじゃないのかなというふうに思いました。

あの場で意見を言ってもらって生徒の意見、教職員の意見が本当に全てなのかというところは分からないなというふうに思ったところでもありました。後で事務局の中で議題が、当日参加できなかった学年の先生がいること、当日は3年生ですよ。他の学年は他にもう少し違う意見があるとか、違う状況だとか、他の学年の先生方も少し違う意見も出てくる場合もあるかなというようにもあったので。1回ではなくて他にも、議会からの意見もいただきましたけど、1回きりでない意見交換が必要かなというふうに思ったところです。

そんなような感じです。

泉委員、出川委員から、今までのことを聞いて何か。

泉薫子 委員

今までのいろんな報告やご意見をお聞きして一番感じたのは、やはり皆様おっしゃっていたように、理念のすり合わせが大事ではないかなというふうに感じました。教育委員会の案と学校からの提案とのイメージが本当に違う人材を求めているように言葉としては受け取れるので、そこが違くと多分暗礁に乗り上げてしまうだろうと思うので。そこをどんなふうにすり合わせていくか。でも多分言っていることは今現行の理念というのが一番その中間的なもので、それを本当に表していて、魅力と特色ある学校を目指すと書いてありますから、それに尽きるんだろうと思うんですけど、それぞれの言葉が違いすぎる。言葉って大事です。理念ということから出てくる言葉はイメージをつくるので、自分たちがどんな人間になるんだというイメージを持ってその学校に入ってくるわけですから、ちょっとこのイメージが違いすぎるというのが今感じた一番の問題かなと思います。そこをどうすり合わせていくかというか、理解をし合うかということをお繰り返してやっていく必要があるのかなというふうに感じました。

こういうことを自分の学校についてと、また熊本市の教育についてこうやって何度も話し合いをしてそれぞれが考えるというのは非常に今回良い、ちょっと上から目線ですけど、良いことをやっているなというふうに感じまして、これは高校だけじゃなくて、高校が変われば中学も変わると思うし、中学が変われば小学校も変わると思うんですね。今非常に学校というものが

変わっていかなくちゃいけない時期に来ているんだと思います。それはやはり不登校が増えている現実を見てもそうせざるを得ないと思うんですね。それをどんなふうにすればいいかというのをみんなでしっかり話し合いをするというのはとても大事なことだと感じますので、自分の学校、熊本市の教育についてたくさんの方がこうやって話し合うということが非常に重要なんだろうなと感じました。感想です。

出川聖尚子 委員

私も感想ですけど、今必由館高校に入っていらっしゃる方が、普通科に入っておられていて、中で将来のことをゆっくり選択したい、選択できるというので選んでいらっしゃる。そこで、今回教育委員会の事務局が提示をされていたのがグローバル探究科とか芸術探究科に分かれていて。普通科であれば今までの実績でどういうふうな将来になっていくか、進路になっていくかというのが見えていて。新しく科ができ、分けられると、教育理念やその教育課程がどんな姿になって、子どもたちは将来を歩むことができるのかを少し示せると、多くの方に理解していただけるんじゃないかなと思います。全国でこういうグローバル探究科のモデルになるようなものがあるとしたら、そういうところが今どんなふうなことをやっているのが分かるとう理解できるようになると思いました。全く新しく考えられたのならないのかもしれませんが、進路が見えにくいところがかみ合っていないのかなと思いました。

例えば県立高校には何科がありますが、そこが魅力的に見えるのは、その科でなにが学べて、将来こういうふうになるというのがある程度の実績があり分かっているの、そういう安心感があるのかなと思います。これからつくるので子どもの将来がどうか分からないんですけど、こういう可能性があると言えることが具体的にあるとイメージができていいのではないかなと思います。そういうのはあるんでしょうか。

遠藤洋路 教育長

今の出川委員のコメントと先ほどの泉委員のご意見、本当にそのとおりだなと思って。入学時点での人物像といいますかね、こういう人に入学してほしいというものの、学校の考え方と教育委員会の考え方のギャップが根本的にあるんだと思うんですよね。今までの教育委員会の案は、まさに目的意識を持った人に入ってもらいたい、ぜひ必由館に、今、出川委員がおっしゃったように、将来こういうことを、こういう進路に行きたいという

人に入ってほしいというのが教育委員会の案なんです。けれど、必由館の現状も、それから今の生徒さんや教員の意見も、入学時点ではまだ分からない、だからこそ入学してからの選択肢が幅広い普通科にしてほしい、残してほしいということで。

目的意識を持った人に入ってほしいのか、それとも入るときはまだ分からないという状態の人が入る学校なのかという、多分、その差が根本的なものであって。卒業時点ではもしかしたら目的意識はみんなあるのかもしれないけど、最初からこういう人に入ってこれという学校の学校にするのか、いや、もう取りあえず最初はちょっと偏差値ちょうどいいから入ったよという人が卒業するときに成長しているということなのか、そういう違いなのかもしれないなと思うんですけど。それって結構根本的な違いで、教育委員会の案としてはやっぱりぜひ必由館に、これが私はやりたいという人に入ってほしい学校にしたかったんですけど、現状はむしろ中学時代にそんなもの決められないから、高校に入ってゆっくり考えられる環境が欲しいし、選択肢が広い方がいいという、その考え方の違い、現状と将来の予測の違いなのかもしれません。

現状は少なくともそういう皆さん中学を出るときにぜひこれがというよりは、どちらかというに入って少し幅広い選択肢の中で、途中で希望が変わることもあるかもしれないし、それでも対応できるようなそういう普通科というほうがいい、そういう気持ちを持たれてるんだなということがよく分かったので、そこをどっちにするかは先にある程度決めておかないといけないような気がしましたね。むしろ入るときはそんな目的意識なんかあまりない状態なのが当たり前ですよと、それでいいんですよというところから入るか、いや、ぜひこういうことをという人材を求めるとかいうものか。中身の理念とかいうよりそこに大分、そのギャップが埋まらないとその先をいくら考えても議論はかみ合わないんじゃないかなというふうに思ったりですね。

西山忠男 委員

今の教育長のお話なんですけど、私は長年大学で教員をしていて、大学生でも入学時点ではなかなか自分の将来像を描けていないんですね。自分が何になりたいかよく分からずに、それこそ偏差値で入りやすい学校に入ってくるというのが現状なんです。理学部も昔は細かく学科に分かれて、物理学科、数学科に分かれてたんですけど、それを統合して理学科というかたち

にしたのは、中に入ってからのどの学科に行くかを決める時間を与えようということで、もうそういう方向に変わったわけですね。そういう経験からいたしますと、やはり中学や高校の段階で、入学時点ではっきりもうこれというのを決めるのは非常に難しいと思います。

教育委員会の案は理想なんだけど、その理想を実現するのは非常に難しく、やはり今回の高校案のほうをある程度尊重しないといけないんじゃないかなというのが率直な感想です。ただ、学校案のままではやっぱりいけなくて、私が書いていたように、スーパーサイエンスハイスクールの指定を目指すとか何か努力をしないと、このままではいけないという思いはあります。

遠藤洋路 教育長

そのときに大きく関係してくるのは、県立との関係ということで、市立としてじゃあ取りあえず入りますという言い方がいかに分からないですけど。実際そういう発言もあったんですけどね、取りあえず大学に行きたいんですという。先生は取りあえず大学に行くんじゃなくみんなよく考えて行っていますと言っていたんですけど、当の生徒は取りあえず大学に行きたいんですと主張していたので、そういう子達が入るということを市立としてやる必要があるのかどうかというところを。現実問題、中学校を卒業する段階あるいは中学校で高校受験を志す段階で進路が決まっている人のほうが少数派だとは思いますがね。少数派の人を対象にするように変えたほうが今後市立高校として存続、発展が望めるのか、あるいは多数派のまだはっきり将来を決めてない人を対象にしたほうが市立の存在意義があるのか。世の中の学校全般でいえば、それはまだ決めてない人のための学校がたくさんある必要があると思いますから、それでいいと思いますけど、熊本市立高校というものがそもそも必要なかというところにやっぱり常に、もし多数派というんですかね、そういうまだ進路を中学校段階で決めていないという人を対象にする学校をつくるのであれば、それはこの少子化の中の市立として維持する必要があるのかというところに戻ってくるような気がするんですよね。それが、いや、市立が要るんですということが言えるのであれば、それはそういうまだ進路を決めていない、あるいは入ってからいろいろ考えたいという人のための学校を市の税金でつくる必要もあると思いますけど。数として、県立と私学で間に合っちゃいますよともし

なったときに、それでいいのかなというところが一番問題なんでしょう。

苦野一徳 委員

先ほど教育長が確実にやって来る未来を見据えて言わば攻めの改革をするのか、問題が起きたときに変えていく、そうすればいいのかというそういう岐路に今立たされているというようなお話があったと思うんですけど、もしも定員が割れそうだと、割れたとなったときに、一般的に偏差値がちょうどいいからというそういう動機の方でずっと入ってきたとした場合、もし定員が割れていくという、確実にそういう未来が見えているわけですから、今のままだとですね。そうすると、統廃合していく必要があるんじゃないかというお話が普通に考えると出てくると思うんですけど、あまりこんな話はしたくないんですけど、でも現実問題としてずっと待っていた場合、私たちとしてはせつかくある市立高校なわけですから、大事に大事にしていきたい。大事にするためには、今ここで何か思い切った、必由館だから行きたいなという学校にしたい、という思いが私たちあるわけなんですけど。ただ、かといって、それはどうしてもその気になれないという声が生徒にあるんだとするならば、それを強行していいことは何もないと思うので、おっしゃったとおり、ここが今多分詰めるべき対話のポイントなのかなと。ただその場合、現状をはっきりと、それから未来のことをはっきりと、もうちょっと多分データを出せるんじゃないかと思うんですけど、今後の熊本の中の少子化の流れだったりとか、今の熊本県でも相当統廃合が急速に進むのだと思うんですけど、これ多分見たら、やがてやって来る波なのはもう間違いないわけで、現状認識をもうちょっと共有しながら、そこまで来てるんだ。だったら攻めようかとなるのか、いや、もうちょっと待とうとなるのか、この辺はもしかしたらポイントを絞って話をしたほうがいいのかなという気がいたしますね。

小屋松徹彦 委員

先ほどもちょっと言いましたけど、これから先どうなるのかというようなことが非常にもう激変消滅みたいなキーワードが出張るような時代が来るんじゃないかなと。5割か6割の仕事、今の仕事なくなるというこういうことを前提に考えると、さて、自分はどうなんだろう。やはりこれから先どうなるかということを中心に自分で組み立てて、そして選択していかないともういけない時代になっていくと思うんですけど、それ考えたら、

これは私の経験で言いますと、私も高校に入るのに目的意識を持っていたわけではありませんが、高校時代のある先生との出会いがその後の進路決定についての動機づけになった経験があります。

そういった経験を踏まえて言えば、小学校、中学校、高校と系統だったキャリア教育が必要だと思うんですね。やはり早いうちから、小学校の少なくとも高学年ぐらいから職業観とか仕事観とかを身につけていき、高校に入る頃にはある程度行きたい学校を主体的に選択できるような、そういう人間になっていきましょうよという流れがそのキャリア教育だというふうに私は考えております。

そういったことから考えても、やっぱり今の延長線上、現状維持じゃないなというふうに思うんですね。ここは何かひとつ思い切って踏み出してみる、改革してみるということは、私は必要じゃないかなというふうに思います。

遠藤洋路 教育長

先ほどの苦野委員のお話でいうと、児童生徒数を見ると、今後10年ぐらいは、熊本市内はそんなに急減することはない。今の小学校1年生の人数と高校1年生、中学3年生の人数はそこまで極端に違わない。あと10年後の熊本市内の学校はそんなに急に統廃合が必要かと言われてたらそうではないです。ただ、市外は非常に厳しい状態ですから、これは県全体の話ですけどね、市外の学校と市内の学校のバランスが本当に熊本市内一極集中でも市外は壊滅状態というふうになるまで熊本市内の学校の定員を維持するのかという問題もあるかもしれませんし。それから、多分去年生まれた世代、今年生まれる世代というのは急減する。15年後、去年生まれた人が高校に入る頃になると恐らく今の数は残らないという可能性がある。そのぐらいの時間的な感覚なのかなというふうには思いますね。だから、あと10年はこのままでいくというのも1つの選択肢としてなくはないとは思いますが、そのときにじゃあ考えて間に合うかといったら、多分間に合わないという、そのぐらいの感触でしょうかね。

苦野一徳 委員

これはもう少しいろいろエビデンスも把握してから考えなきゃいけないことではあるんですけど、先ほど西山委員がおっしゃった大学生がなかなか、何をしたいのかとか進路を決めたいで来てるわけじゃないというのは本当におっしゃるとおり

で、それはただもう一方で、そういう選択肢しかなかったからということもあると思うんですね。偏差値で入学を決めるとい、もうそれしかないからもうそうなるのは当然のことですね。逆に言うと、そうじゃない価値基準の学校があつて、特色があつて、これは面白い、自分がやりたいよという学校があつた場合、今まで気づかなかつたニーズを掘り起こせる可能性もある。そのような仕方では様々な学校が違う価値基準というか、いろんなオルタナティブなものを出していつている時代だと思うんですね。そういう意味では、もちろんたくさんそこは背景、エビデンスを押さえていく必要はありますけど、あるいはニーズ等々、もっともっと調べる必要性があると思うんですけど、そういうことだと思うんですね。説明というのはそういう今までの価値基準の違うものをつくることで新しい市民のニーズを掘り起こしていくとか、違うキャリアパスというのを身につけていくとか、そういった発想も含ませながら考えていく必要があるのかなというふうに思います。

小屋松徹彦 委員

ちょっと市立高校ならではというところではいきますと、先生がずっと安定していらっしゃるんですね、同じ先生。県立高校は大体3年ぐらいで替わっていきます。でも、市立高校の場合はずっといらっしゃる。先生が安定してそこにいらっしゃるといことは、これは逆に非常に大きなメリットじゃないかと思うんです。活かしようによっては本当にさっきおっしゃったような特色のある学校づくりも腰を据えてやれる土壌があるわけですから、非常にそういった意味では、市立高校ならではの特色を生かすという意味では、先生方に考えてもらおうと。

西山忠男 委員

今小屋松委員がおっしゃったとおりで思うんですね。そういう意味ではすごくある意味強みがあるわけですね。私がさっきからスーパーサイエンスハイスクールと言ってるのは、その強みが生かせるんですね。スーパーサイエンスハイスクールはものすごく実施するのは大変なんですけど、県立高校の場合は人が異動しちゃうから担当者が消えてしまつて継続が難しくなるということがあるんですけど、必由館だったらその心配はないから、優秀な教員を確保してしっかりしたチームをつくれれば絶対できると思います。スーパーサイエンスハイスクールにさえ指定されたらもうかなりの魅力ある学校がつくれる。その中で国際もやれるし、いろんなことをやれるはずなんです。特に

	財政的支援が得られるというのは大きいですよ。市の財政だけではもう限界がありますから、やはり外部資金を取ってこれるというのはとても大きくて、そういう意味では魅力あるシステムだと思うんですよ。
遠藤洋路 教育長	スーパーサイエンスハイスクールはただ期間がありますよね、ずっとではなくて何年間かで。特に財政的な支援は期間が決まってる、そこはいかがですか。
西山忠男 委員	もちろんある期間でやらなきゃいけないんですけど、あとは自走しなきゃいけないというそういうシステムになっていますけど、あれ繰り返し申請はできなかったんですかね。
遠藤洋路 教育長	繰り返しもできますけど、多分そんなに何度も繰り返しは選ばれない。
西山忠男 委員	そうですか。
遠藤洋路 教育長	そういう可能性があると思います。
西山忠男 委員	まあでも最初立ち上げのときにそれだけ支援を受けられれば大分違うと思うんですよ。システムがつくれれば、あとは市の方から多少援助してもらってプロジェクトを続けることはできると思います。
遠藤洋路 教育長	分かりました。この件は大分時間も経ちましたので、一度、せっかく校長も来ていますから、全体を踏まえて校長から意見を聞きたいなと思いますけど、いかがでしょうか。
城野実 必由館高等学校 校長	学校の、一番今日話題になっていた理念という考え方の違いということが1つ、私たちが出した中の12ページのほうにある部分で、やっぱり今の高校というところが今日の話の中で、学校の中でどうしてもやっぱり部活動という思いが強くて、うちだと文化部も運動部もしっかりベスト8以上にいたり、全国の総文祭にそれぞれが出場していたり。これはコースではなく普通科、普通の子たちが部活動では和太鼓にいて全国総文祭で頑張ってるのかという部分であって、そのところというのがそれぞれのコースはその専門性を生かしてなんですけど、普通科、

普通とか国際に関しては、それプラス部活動、これが中学校からのニーズも回ってみて高いんですね。そこの視点は今日のお話の中で出てこないというところが学校の思いとのずれが一番大きいのかなと。

やっぱり生徒が生き生きした姿で学校生活を送っている、それが行動とかいろんなどころに出ていく姿というのが、やっぱり部活動が一番表に出やすいので、そこで活躍している姿を市の中学生とか見る中で、必由館高校に行って和太鼓がしたい、必由館高校に行ってバレーがしたいという思いの生徒たちが入学してくれるというのが根本的に学校の中にはやっぱり思いがあります。この働き方改革の中で部活動の時間というのが制限される中でも、やっぱり自分たち、特に必由館の先生たちの中には、私もずっと卓球を教えていて、自分も今でもプレーしていて、やっぱり部活動をしながら生徒と進路のことを語れるということで教員を選んだという思いがとても強いんです。ですから、その部活動というものが学校の魅力とか、そういうものの中ですごく学校側としては高い。その面で考えて出した案が学校案というところなんですね。そこのところが今日の会話でも評価してもらえていないし出てこないという部分は少し残念だなと思っています。

ただ、それ以上に昨年度のE d u c a t i o n W e e kでも国際会議に参加したことの発表をしたし、学校はこの3、4年で十分変わっていていると自負しています。国際会議にも出ていますし、今年もその探究についても昨年度から6回ぐらい校内での研修も行っています。来月のE d u c a t i o n W e e kでも校則の見直しについても県立高校に先駆けていろんな取組をしています。そういうこの2、3年で教育委員会から言われている部分に関して、教育委員会のこの原案にあることに対して学校としては先取りしながらこのSDG sの探究もしておりますし、それをやってるからこの文章の中には学校案としてはもう出ていないという状態なんですけど、それがうまく私の説明が悪いのか伝わっていないのか、生徒たちはE d u c a t i o n W e e kでも発表してるし、それが伝わってないのであれば、ちょっとそこをうまく伝えんといかんのかなと。

中学校を回って、今年かなりの中学校を回りましたが、その中ではE d u c a t i o n W e e k、特に熊本市の中学校は昨年度放送も見てくれてて、ああ、必由館高校が変わってるということは生徒たちも先生たちも声をかけていただいている

遠藤洋路 教育長

状況なので、このマイナーチェンジの部分で今やってるということも認めていただければと思って、そこだけ伝えたいと思います。

今校長がおっしゃったような意見というのは、この前の意見交換会のときに生徒からも教職員からも出てなかったんですよね。少なくとも部活動については私のグループでは一切出てこなかったですし、Education Weekに関しても一切出てこなかった。だから、伝わってないというよりも、本当にそれを求めて入学して、それが本当に思っているのか、校長の思いと教職員や生徒の思いが本当に一致しているのかというところも少し疑問を今感じました。校長がそこまでおっしゃるんだったら、なぜ意見交換のときに一切、部活動の話もEducation Weekの話も校則の話も、一切出ないのか。他のグループはあったかもしれませんが、やはり大学進学したい、受験勉強したいという話がほとんどでしたから、それ以外のことが、私のグループだけかもしれませんが、ほとんど出てこなかったというのが実際に意見を聞いてみたことなので。なぜそれが伝わっていないのかと言われたら、そういう意見がなかったからというのが一つの現実だと思うんですよね。そこは、もしそれが特色なんだし、みんなそこに思いを持って入学してきているのであれば、意見交換のときにそれを聞いたかったなというふうには思いますけど。

他の委員さんたち、どうでしょう、部活動の話は出てきましたか。

西山忠男 委員

私のところでは定員を減らすことに対して、反対理由として、部活動が衰退しますから反対しますという意見は出ました。

遠藤洋路 教育長

そこは生徒会の要望書でも確かにそう聞いてます。そのときに確かに意見が出ていましたけど、当日の意見交換で部活動のことは、生徒のそれぞれ感想を言った中にもあまり出てこなかった。全く意識してなかったんですよ。今日の議論で。それはなぜかという、全くそれが出てこなかったから意識してなかったの。もしそれが一番大きな学校の考え方と教育委員会の考え方の違いだとおっしゃるのであれば、なぜ学校はその意見を意見交換のときに全く言わないのか、そこはぜひ聞きたいですよ。意見交換で出た意見を基に議論していますから、なぜ

	<p>私たちの意見を分かってくれないんだというのであれば、それは意見交換のときに言わないと、それは分からないですよ。</p>
<p>城野実 必由館高等学校 校長</p>	<p>前回の会議の場がそちらの意見が多かったと私は認識しているんですね。この前にオンラインでやったときのそれぞれの、私は出川委員と一緒にいたところだったんですけど、そういう中では部活動のことを説明したと思うんですね。今回質問されることに答えるようなかたちというのが多かったので、その部活動に関してとか、こちらがこういうことをやってるということの質問が少なかったので出ていないと私は思っていました。</p>
<p>遠藤洋路 教育長</p>	<p>私のグループは特に質問に答える形式ではなく、1人1人順番に意見を言ってもらったんですね。今回の意見交換は別に、教育委員会からこういう質問をしますよということを事前に決めていたわけでは全くない、むしろ私たちも当日までどういう内容なのか知らされないという意見交換だったので。学校案について意見を聞かせてくださいというところから始まったんですよ。だから、あまりこちらが質問項目決めてそれに答えてくださいという形式ではなかったと思います。</p>
<p>城野実 必由館高等学校 校長</p>	<p>多分、学校案に対してということまで話をしていたので、学校案のところにもその部活動のことを強く言ってない、理念以外のところで触れてないから、そういうそれぞれが説明するのを打合せしたわけでも何でもないので、それぞれの思いが出たところで今回出てこなかったんだなど。先ほど言ったように、それについては私たちの報告、言い方の問題だったんだなどというのは、認識はしていたので、先ほどもやっぱり我々の説明が足りないのかなという、せつかくの会議だったのに申し訳なかったなど。</p>
<p>遠藤洋路 教育長</p>	<p>説明が足りないかどうかというのは別に、そこは必要なら説明すればいいと思うんですけど。むしろ部活動が一番の特色だったらなぜ学校案には部活動のことが出てこないんですか。</p>
<p>城野実 必由館高等学校 校長</p>	<p>学校案に具体的な部活動名がないだけで、学校としてみれば特色のある部分については、部活動を考えるという部分の意識はすごくあってつくっております。表記としても、元々のこの文武両道という言葉自体が文化部、運動部含めた部活動と勉強</p>

遠藤洋路 教育長

の両立ということで学校案としては出してるので、その理念の1番にも文武両道というのは部活動と勉強の両立ということで1番に謳っているものだと思います。

分かりました。

西山忠男 委員

改革を考えるときに、やはり一番重要なポイントは教育カリキュラムだと思うんですね。それから、育成する人材像だと思うので、部活動が主体になるというのはちょっと私としてはあまり納得がいかないんですね。部活動はやはり二次的な要素ではないか。それが現在の高校生、必由館高校に引きつけているという事情は分かりますけど、我々が改革案として目指すときには、先ほど言った教育カリキュラムと目指す人材像というところにやはり議論を絞っていかないといけないんじゃないかなという気がしますけど、いかがでしょうかね。

遠藤洋路 教育長

その人材像が部活動を通じて達成されるのであれば部活動に意義があると思いますし、部活動が特色だという学校もあっていいと思います。千原台なんかはそういう、1つの特色として部活動を打ち出してますので。ただ、そこまで部活動が主なのであれば、その温度感があまり、この前の意見交換はやっぱり偏差値で決めたんなんですということが前面に出てきたので、そうなんだということで受け止めて帰ってきたんですけど。部活に魅力があって入ったんですという人が何人か聞こえてくる声でいけば、ああ、そうなんだとか、そういうこともあるんだという認識でいたかなと。今校長がおっしゃったので、そういう生徒さんも中にはいらっしゃるんだなということでは分かりましたので。部活動だったら部活動でもう少し特色をどう出していくかというのはあってもいいのかもしれないですね。

ただ、西山委員がおっしゃるように、部活動のために学校をつくるとか、市立学校を存続させるということは多分難しいので、やはりそこは市立学校としての存在意義、必要性という意味でいえば、部活動は1つ特色としてあってもいいんですけど、存在意義としてはなかなかそこをメインにするというのは難しいかなというふうに思います。

小屋松徹彦 委員

私も部活動に関する認識としては、恐らく定員が210人となってくるとかなり生徒数が減ってしまうということから、部

	<p>活動が成り立たなくなっていく、そういう危機感から多分出たのかなというふうに理解していました。ちょっと今校長の考えとは違うかなというふうに思いました。</p> <p>それともう1点、今回の意見交換会で、ちょっと消化不良に終わったのが、先生たちとの意見交換ができなかったんですね、正直。ですから、ぜひ先生たちとの意見交換というか、こういう場をつくってやってみたいなど。生徒さんじゃなくて先生たちとやってみたいなどというふうに思います。</p>
遠藤洋路 教育長	<p>この前も半分先生だったですよ。生徒をメインにやられたんですね。</p>
小屋松徹彦 委員	<p>生徒メインになってしまって、先生たちにはちょこちょこことになってしまうので。</p>
遠藤洋路 教育長	<p>私のところはできるだけ先生の意見を聞いたんですけど、全員喋ってもらったと思ったら、よく考えたら目の前にいた教頭だけ喋っていなかったとか。ああ、すみません、忘れてましたというふうな感じでした。先生にもある程度聞きましたけど。</p> <p>やっぱりこういう理念先行というか、あまり先回りしてこれが必要だよと言われても、ちょっとついていくのが難しいですというような、そんな感触が大体のところだったなというふうに。</p>
南弘一 千原台高等学校 校長	<p>本日は必由館高校の学校改革に対しての自由討議でして、私が発言していいものかどうか迷いましたが、今のお話の流れの中で、本校も今改革を進めておりまして、似たような悩みが出てきている部分もございますので、現状のご報告と、それから教育委員の皆様、事務局の皆様に若干のお願いがございまして、発言させていただいてよろしいでしょうか。</p>
遠藤洋路 教育長	<p>どうぞ。</p>
南弘一 千原台高等学校 校長	<p>本校の場合、6月に基本計画が策定されまして、それに基づきまして今教育課程が示されている段階でございます。この教育課程が示された段階で、学校の意見も述べながら事務局にも考えていただきながら教育課程を策定しているところですけど、いざ教育課程が示されて、目の前にこういった教育課程で</p>

やっていくんだということを職員が真剣に、自分がこれをやると考え始めたときに、いろいろな問題点、いろいろなこれ大丈夫だろうかという不安、そういったものにぶつかる現実があるというふうに感じております。そういったところ、実は職員等から私たちの意見をもっと聞いてほしいという申出がございまして、高校改革に限定した臨時の職員会議を一昨日行いました。そこで様々な意見を私も受け止めました。

主に3つありました。1つは、教育課程を見たときに、先ほどの議論にも少し重なりますが、本校ではスポーツのスペシャリストやビジネス界でのスペシャリストを目指すという方向を示しておりますけど、とはいえ、そういうふうな方向できたけど、途中でやっぱりその方向ではちょっと難しく、進路を学業の方で普通に勉強して大学に行きたいという生徒も現実にも今数名毎年おるわけで、そういった生徒にも対応できるようなカリキュラムになっていないんじゃないか、そこはやはりそういうカリキュラムにするべきではないかという意見です。

2つ目としては、現実的にいろんなものが見えたときに、この教育課程を実施したときの、まず人、例えば情報ビジネスでは非常に専門の科目を増やしましたので、商業科の職員がかなり必要になってくる。恐らく4、5人は。これは私の個人的な算定ですが、あれを完全に実施するとなると4、5人の商業科の職員を増やさなければカリキュラムは止まります。ところが、今の教職員らと面談させていただきましたが現実講師の先生が、ご年齢のこともあって勇退されたいというような方が出てくるような想定の場合に、それを埋める人材を見つけるのが非常に厳しい。だから、改革はもとより、来年の商業の授業も回るかというのが非常に今頭を悩ませてるという現実がございまして。

それから、場所の問題ですけど、これはもう今旧棟がございまして、古い校舎ですね。あれを解体して新しくしてこちら側に建てるという案が平成22年に設計図までできておりますが、それが財政のことでストップしてる。それを今進めていただこうというふうに一生懸命担当が、財政と闘ってくれていますが、なかなかご存知のと通りの財政状況で、我々が望むようなものが建つ見通しが立ちません。軽量鉄骨の2階建てで、最初は鉄筋コンクリート6階建ての予定が軽量鉄骨2階建て、6部屋の予定が4部屋ということで。じゃあ、活動場所を減らされて、こんな専門的なスペシャリストを養成できるのかとい

う声が現場から挙がっています。

3つ目が、そういうことを受けて職員の中からは、やはり今必由館高校で論議されてますよね、マスコミ等でもじっくり今論議が行われてるんですね。ただ、本校の方は一応どんどん先に進んでいるという状況に非常に不安感を持っておりまして、今後もう少しじっくり話す時間が欲しいと、1年間遅らせることはできないのかということを経済委員会会議でも言ってくれというふうに直接職員から言われましたので、それを意見として言うことは、約束してまいりましたので、今お話ししました。

これに対して私からは3つ職員に案を出しました。1つ目は、定期的に、昨日、一昨日も午前中オンラインで市立学校・専門学校改革検討会議というのを行ってます。月1回行ってます。教育次長が司会していただきまして、我々3人の校長も入っています。そこで我々はいろんな情報をやり取りします。これを私としては下ろしているつもりでしたが、いろんな、Teamsに載せたり、いろろしているんですけど、やはり職員としては毎日忙しく仕事をしていきますので聞いていないんだという状況も生まれてしまったと反省しまして、今度会議の後には必ず全職員でその報告、検討する場を持つということを提案しました、校内でですね。そこに事務局の方々にも入ってくださいということで、それは担当課長にもお願いして承諾を得ました。

2つ目として、もっと小さい単位で、例えば情報科なり、それから体育科なり科会があります。教務部会、総務部会、いろいろあります。そういったところで例えばカリキュラム全体のことであれば教務部会とか。先日は場所のこと等で情報科会に入ってもらいました。そういうふうに小さい部会をつくって事務局に直接入ってもらう、直接対話をしよう、とにかく直接対話。今まで私を通しての間接対話だった。なので職員からすると、一昨日ははっきり言われましたけど、校長は教育委員会側に立って、どうせ教育委員会側から話されたことを言うだけでしょと、そういう言い方をされた。私はそうじゃなく、しっかり伝えて情報を共有しているつもりでしたけど、それが職員側に伝わっていなかった、私の指導力不足もあったと。それが2点目、直接対話を入れること。

3点目として、今若干その波が同窓会や保護者会の方にも波及しておりまして、同窓会や保護者会にももう少し説明が欲しいというような声も私どもに聞こえつつあります。なので、そ

遠藤洋路 教育長

ういった中、今のような議論について、千原台でも必由館で行われたような意見交換会を持っていただければありがたいということ、これは私の方から願います、伝えるということで。

以上、3点を職員に申し上げましたので、一応ご報告をさせていただきます。以上です。

ありがとうございます。これは必由館と千原台に限ったことではないんですけど、何年間議論してもどれだけ話をしても、興味がないちは聞いてないんですよ。いざ自分のことになったときに聞いてないぞと言い始めるということは、これはもう常に、この高校改革だけじゃなくてそうですので。去年からのいろんな休校とかの話もそうですし、さんざん議論して決めていても、自分に関係ないと思っているときには聞いてなくて、いざ自分のことになったときに、何でそんなことを突然決めるんだ、上から降ってくるんだということになるんですよ。だから、そうやっていざ自分のことになって聞いてないぞと言って聞き始めたときからが改革ということなんだなというふうに。私もこの仕事を5年近くやっていて、いつも同じことをずっと思っていたので、そういうことなんだろうなというふうに思います。千原台もいよいよそのステージに入って、中身の議論に入ったのかなというふうには思うんですけど。逆に言うと、そこまで何年もかけないでさっさとやってもいいのかなと、思ったところもありますけど。ここからどれだけ、時間をかけるかどうかは別として、丁寧に議論をしていくということは必要だなと思っています。

だから必由館は、そのもう少し前に自分たちで気づいて、ちょっとどうなるんだろうと思いついたから今議論が、ということなのかなと思います。

松永直樹 学校改革推進課長

これに関しては教育市民委員会におきましても、委員からご指摘を受けております。具体的には、千原台高校については、議論は進んでいるけれど、高校生の進路希望が変わってもある程度の対応ができるような教育は提供していただきたい。また、生徒、保護者、同窓会、教職員との学校改革の協議の場を増やし、必由館高校と同等の対応を行っていただきたい、こういった要望がございました。私たちといたしましては、検討会議でございましてか担当部会において校長先生、教頭先生、また教務主任の先生方との対話の場は、正直申し上げまして、必由館

高校以上に設けてきました。私自身も各校毎月1回ずつ以上、合わせると30回以上各校回らせていただいておりますが、千原台高校、ビジネス専門学校により多く回っております。思いとしては改革を先に進める千原台高校、ビジネス専門学校について、より丁寧に対応していかなければならないという思いでありました。ただ、やはり我々が、話の進め方として拙い部分とございますか、十分でない部分があったというのは、校長先生からのお話のとおりのございますので、しっかり現場の先生とも意見交換をしていきたいと思っています。先日も商業の先生、また家庭科の先生ともお会いをさせていただきまして議論したのですが、やはり直接会うことによって分かるところが大変ありますし、理解し合えるということもございますので、この点につきましては必由館高校と同様にビジネス専門学校、千原台高校、両校ともに進めていきたいというふうに考えておりますので、よろしく願いいたします。

遠藤洋路 教育長

これまで担当も随分丁寧に、何度も何度もお話をしてくれて進めている。千原台高校に関しても当然そうなんですけど、やっぱり先ほど申し上げたように、いくらそうやっていてもいざ自分のことになるまではあまり意識しないという、これも現実として、それがいい悪いじゃなくて、そういうものじゃないのかなというふうに思います。

ただ、千原台高校で出てきている論点は、どちらかという時間割であるとか建物であるとか、物理的なものといいますが、そういった面が多いので。必由館のような理念、根本のところの意見の違いということではないので、ある程度個別にこの時間割はどうしますかとか、この建物はどうしますかとか、ここはどうしますかということを一箇所一箇所詰めていけば解決できるのかなという、そういうふうに思っています。だから、少し違いはあるのかなと思いますけど、いずれにしてもやはりそれは、先生方は自分のことだと思って、そして自分たちでじゃあこうしようと決めてもらわないことには最終的には進みませんから、そういう思いから今やっているとかなというふうに思います。

西山忠男 委員

事務局の方は何度も訪問されていろいろ打合せしておられると思いますが、我々教育委員としてはまだ一度も伺っていないし、意見交換会もやっていないんですよね。もう改革の方向

	<p>性は決まってるからそれほど重要じゃないということかもしれないんですけど、教育委員会の姿勢としてはやはり一度同じように伺って意見交換をして、向こうの意見を承るということは重要なことではないかなと私は個人的にはそう思います。</p> <p>別の広聴会のときに千原台の先生から現場の意見を聞いてくださいということも前から言われていたので私すごく気になっていたんですけど、今回校長先生からご提案がありましたので、できれば行って意見交換会をしたいと、私は個人的にはそう思うんですけど、いかがでしょうか。</p>
遠藤洋路 教育長	<p>必由館と同じようにということですから、意見交換会をした方がいいんじゃないかと思います。これまで全くやっていなかったというよりは、ワークショップもやりましたし、意見交換の機会はありましたけど、ただそれは直接千原台の場所で意見交換は今までしたことがないので。だから、必要があるのかなと思いますけど、どうですか、皆さん。特に異論ありませんか。</p>
西山忠男 委員	<p>もう1ついいですか。それと、報道の関係もあるんですけど、必由館ばかり取り上げられていて、千原台やビジネス専門学校のことは全然報道されないですよ。これは市民の目から見てちょっとやっぱりおかしいと思われるんじゃないか、不公平感を生んでるんじゃないかという気持ちもありますので、やはり行ったほうがいいんじゃないかなと思います。</p>
遠藤洋路 教育長	<p>揉めないで報道してくれない。今まで千原台はそんなに問題なくいっていたからほとんど報道されていないけど、同じようにって話をしてるわけです。これで少し千原台も揉めているかもしれないというところの意識が報道の中に芽生えたら、これから報道するかもしれません。今度はそうしたらビジネス専門学校も、少し何か反対しないと報道してくれないのかなと。</p>
城野実 必由館高等学校校長	<p>申し訳ありません。やっぱり私が、さっき思いが強すぎたから部活動という印象が残ったのかもしれませんが、あくまでも文武両道で、勉強、進学するという気持ちとか探究をしたいという思いというのはもうこの理念に書いているとおりのので、部活動を優先的にどうのこうのというわけじゃなく、ただ生徒たちの視点に部活動というのがあるぐらいの程度で構わないんですけど、という発言でした。ちょっと気持ちが入りすぎ</p>

遠藤洋路 教育長

て捉えられ方が違ったのかもしれませんが、教育課程とかそういうものに関しては本当に地域に根差した教育課程をすごく考えておりますので、よろしく願いいたします。

他の委員から何かご発言ありますか。大丈夫ですか。

では、今必由館に関してはこれまでずっと議論してきましたし、千原台に関しても校長からご意見ありましたので、少なくとも千原台に関しては行って意見交換をする会というのが1つ必要なのかなということと。これまで決して必由館ばかりやってきたわけではなくて、今報道を見ているとそう見えるのかかもしれませんが、そこは当事者としては十分に3校とも同じように考えてきているということは申し上げておきたいというふうに思います。具体的な姿はまたちょっとご相談するとして、各学校ですね、引き続き丁寧に進めていければというふうに思っていますので、よろしく願いします。

大分長くなってしまいましたけど、自由討議は以上でよろしいでしょうか。

では、今日の意見も踏まえて、また今後の進め方については改めて考えていきたいと思います。

〔閉会〕

遠藤洋路 教育長

本日の日程は全て終了したので、令和3年12月の定例教育委員会会議を閉会いたします。お疲れさまでした。